# 顕現後第2主日　ヨハネ2章1―11節

［直訳］

1 そして　三番目の日に
　婚礼が　起こった　ガリラヤのカナにおいて、
　そして　いた　イエスの母が　そこに。
2 だが招かれた　イエスも　彼の弟子たちも　婚礼の中に。
3 そして　足りなくなって　ぶどう酒が、
　言う　イエスの母が　彼に向かって、
「ぶどう酒を　彼らは持っていない。」
4 ［そして］彼女に言う　イエスが、
「何が　私とあなたに、　婦人よ
　まだ来ていない　私の時が。」
5 言う　彼の母が　給仕たちに、
「なんであれところのことを　彼が言う　あなたがたに、
　あなたがたは行いなさい。」
6 だがあった　そこに　石製の水がめが　六つ
　ユダヤ人たちの清めに従って　置かれて、
　容れるものが　それぞれ　二あるいは三メトレテスを。
7 言う　彼らに　イエスは
「あなたがたは満たしなさい　水がめを　水で。」
　そして　彼らは満たした　それらを　縁まで。
8 そして　彼は言う　彼らに、
「あなたがたは汲みなさい　今、
　そして　あなたがたは運びなさい　世話役に。」
　彼らは　そこで　運んだ。
9 だが味見をしたとき　世話役が
　水を　ぶどう酒に　なったものを、
　そして　知らなかった　どこから　それがある、
　だが　給仕たちは　知っていた　水を汲んだ者たちは、
　呼び寄せる　花婿を　世話役は、
10 そして　彼は言う　彼に、
「すべての人は　まず　良い　ぶどう酒を　差し出す、
　そして　人々が酔うとき、　より劣ったものを。
　あなたは　取って置いた　良い　ぶどう酒を　今まで。」
11 これを　行った　しるしの最初を　イエスは
　ガリラヤのカナにおいて、

そして　彼は現した　彼の栄光を、
そして　信じた　彼を　彼の弟子たちは。

［新共同訳］

1 三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。2 イエスも、その
弟子たちも婚礼に招かれた。3 ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がな
くなりました」と言った。4 イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがある
のです。わたしの時はまだ来ていません。」5 しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言
いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。6 そこには、ユダヤ人が清めに用いる石
の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。7 イエスが、
「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たし
た。8 イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。
召し使いたちは運んで行った。9 世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒
がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花
婿を呼んで、10 言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったも
のを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」11 イエスは、この
最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信
じた。

## ①構成

ⓐ1―2節

ヨハネ福音書の1章1―18節はプロローグであり、1章19節以後は日付のついた出来事が語られる。2章1―11節は、1章19節の最初の出来事からちょうど一週間後になる。これを「七日間」で神が世界を創造したことと結びつけ、新たな創造を意味していると考える人もいる。

ⓑ3―5節

4節の「何が私とあなたに、婦人よ」はヘブライ語からの表現であり、敵意を込めて使われることもあるが、ここでは「私たちは何もそのことのために共有していない」、つまり「それは私たちの仕事ではない」の意味だろう。イエスが栄光を示すべき時は、神が決める。母マリアはイエスがどのような行動を取ってもよいように、給仕に指示する。マリアは信じる女性である。

ⓒ6―8節

6節の「清めのための六つの水がめ」をユダヤ教の不完全さの象徴とみなす人は、この奇跡によって清めの律法がイエスによって克服されたと考える。いずれにしても、大仰なジェスチャーや言葉もなく、水がぶどう酒に変わる。

ⓓ9―10節

水から変わったぶどう酒を享受する人たちは、誰がそれをもたらしたのかを「知らない」。

ⓔ11節

ここには「しるし」、「栄光」、「信じる」という三つのキーワードが使われている。

## ②婚宴の危機（3―5節）

ⓐぶどう酒が尽きてしまえば、祝いも興ざめとなり、新郎も恥をかく。婚宴は続いているが、破局は迫っている。母マリアの「彼らはぶどう酒を持っていない」という言葉には、奇跡を直接求め

るのではないにせよ、この事態を何とかしてほしいといった切実な願いが言外に込められている。

ⓑイエスは「何が私とあなたに」と答えるが、これはヘブライ語的な表現であり、ここでは「この仕事は私たちの仕事ではない」を意味するだろう。イエスがこのように答えたのは、彼の「時」がまだ来ていないからだ。彼の「時」とは栄光を受ける時のことだが、それは十字架に上る時のことを指す。十字架における死と復活を通してイエスは、父なる神といっそう親密な関係に入るが、その「時」が来るまでは、父なる神の許しなしには何事も行わない。しかもその「時」を決めるのは神であり、イエスでもマリアでもない。こうしてイエスは母の要求にそえないことを述べ、この危機を乗り越えられるかどうかは、すべて神にかかっていることを示す。

ⓒただしイエスは母の願いを冷たく拒絶したのではない。「婦人よ」との呼びかけには、婚宴の席にいながら、台所のことにまで気を配るこまやかな母への賞賛を読み取ることもできる。イエスは、母のこまやかな配慮を受けとめながら、母の心を神へと向けようとする。

ⓓマリアは願いを拒まれても、それで心を閉ざしはしない。給仕にイエスの言葉に従うように告げ、神の時に備える。彼女は理解できない言葉を前にしても、信じて待つ女性である。

**③危機の克服（6―8 節）**

ⓐこのように神に信頼するイエスと母に、神が応答する。ただし危機を克服するのは神だとしても、人間の側はそれに応じた態度を取らねばならない。そのような態度が、給仕たちの忠実な行動である。イエスの指示通りに、彼らは水がめの縁まで、あふれるばかりに水を満たし、それを汲んで宴会の世話役のもとへと運ぶ。

ⓑこの奇跡の特徴は、特別な身振りも言葉もなく、水がぶどう酒に変えられる瞬間も描かれないことである。むしろイエスの存在を通して、水はいつの間にかぶどう酒に変わってゆく。

**④奇跡の結果の享受（9―10 節）**

ⓐ人々の前にイエスは登場せず、ただ上等の、しかも豊かなぶどう酒が運ばれてくる。それまで通り人々は浮かれて宴を楽しむ。危機があったことも、その危機が乗り越えられた秘密も知らない人々が、この良いぶどう酒を享受するのである。

ⓑこのような奇跡は、まさに神がどのような方であるかを伝える「しるし」である。神は人が何も知らずに浮かれている間に、黙ってそっと救う方である。

**⑤結び（11 節）**

ⓐこの節は「彼の弟子たちは彼を信じた」で終わるが、「弟子たちが信じた」という表現はヨハネ福音書ではこれが最初である。1 章 19 節からは、洗礼者ヨハネから離れて、イエスのもとに集まる弟子たちが登場するが、この動きの頂点がこの「信じた」である。イエスの「栄光」を前もって現す「しるし」としての奇跡を目にした彼らはイエスを「信じる」。カナの婚宴が 1 章 19 節から数えて、一週間目にあたるのも、このことと無縁ではないだろう。

ⓑしるし（セーメイオン）

この語は基本的には「ある人物や事物を他のものから区別するしるし・特徴」を表す。

㋐「目印・合図・特徴」。ユダの接吻はイエスを逮捕するための「合図」となり（マタ二六 48）、人の子の再臨は終末の「しるし」となる（マタ二四 30）。

㋑「不思議な業・奇跡」。このような業を行うのは、悪魔やその使い（2 テサ二 9）、偽メシアや偽預言者（マコ一三 22）のこともあるが、ほとんどは神、あるいは神に属する人（イエス・

弟子たち・信じる者）である。しかし、ヨハネ福音書では、ただイエスに限定されており、イエスの独自性を示す言葉として使われている。

㋒ヨハネ福音書でのイエスは「しるし」を行って、ご自分の栄光を示し（二11）、神が彼と共におり（三2）、罪のない人であることを示し（九16）、終末的な救いを運ぶ方であることを表す（六14）。従って、しるしは単なる不思議な業ではなく、イエスが誰であるかを示す出来事である。しるしを見て信仰は生まれるが（四48）、しるしとイエスを切り離し、しるしがもたらす賜物だけに目を向けるのは間違っている（六26）。

ⓒ栄光（ドクサ）

㋐この語には、世俗ギリシア語に由来する用法と七十人訳に由来する用法がある。前者は、ある事柄や他人に対する「考え」や、他人から与えられる「評価・誉れ」を意味し、後者は「輝き・栄光」を意味する。ヨハネ福音書では、しばしば「誉れ」と「栄光」の意味は重複しており（七18、八54など）、用法上の厳密な区別はない。むしろヨハネが強調するのは、ドクサ（誉れ・栄光）が誰からのものか、そのドクサを受けるのが誰かである。

㋑ヨハネのドクサ（誉れ・栄光）は、第一義的には「神からのドクサ」である。それには「人間からのドクサ」が対置される。ユダヤ人たちは「人間からのドクサ」を受け、それを「神からのドクサ」よりも好む。だが、イエスは「人間からのドクサ」を受けず（五41）、自分のドクサを求めない（八50）。イエスは「彼を遣わした方のドクサを求める者」であり（七18）、「神からのドクサ」だけを求める。

㋒それゆえ、「神からのドクサ」を受けるのはイエスである。神はイエスの父としてイエスに「ドクサを与える方」であり（八54）、そのドクサはイエスのうちに輝き出る（一14など）。動詞形ドクサゾーも、多くは「神がイエスにドクサを与える」の意味か、受動態で「イエスがドクサを受ける」の意味である。

㋓イエスに神のドクサが輝くのは、イエスは自分の意志ではなく、彼を遣わした神の心を行う者として（六38）、自分のドクサでなく、神のドクサを求めるからである。神の御心を行い、自分のドクサを断念するイエスの姿は十字架にはっきりと現れる。十字架は神から遣わされたイエスの任務であり（一二27）、その任務を果たして死ぬイエスに（一九30）、神はドクサを与えて高く上げ（一二28・32）、復活させる（一〇17）。そのため、ヨハネ福音書のドクサは、神から遣わされたイエスの死と復活を通して、イエスと神が作り出す救いの輝きを表している。十字架に上ったイエスに神が与えたドクサは、イエスを通して信じる者に与えられ（一七22）、満ちあふれる恵みとなる（一14・16）。

**⑥神の救いのしるしを見る**

ⓐヨハネ福音書によれば、独り子として父の栄光を目にしたイエスは、その栄光を地上での活動を通して現している。それゆえ、共観福音書が、イエスは復活し天に上げられて初めて栄光に輝くと描いているのに対して、ヨハネは地上での活動からすでに栄光に輝くとしている。カナの婚礼の出来事が「しるし」と呼ばれるのは、十字架に上り復活したイエスに輝く神の栄光を垣間見させる出来事だからである。カナの婚礼は、神の救いのしるしを人々が見る最初の場となった。

ⓑ8章54節に「わたしが自分自身のために栄光を求めようとしているのであれば、わたしの栄光はむなしい」とある。水がぶどう酒に変えられたのは驚きであるが、それはただの不思議な出来事ではなく、神とイエスの栄光を示す「しるし」である。真に驚くべきなのは、人の知らないうちに危機を乗り越えさせる神である。この神の栄光を現すために、イエスは黙って十字架に上る。